

叙述のbe動詞の統語的特異性・再考

藤内 則光

Abstract

The purpose of this thesis is to analyze syntactic irregularities of the predicative be-verb in the minimalist approach. In this thesis, syntactic irregularities of the predicative be-verb are successfully solved through some speculative but reasonable hypotheses and general interaction of syntactic, lexical features. This thesis also refer to some syntactic properties of auxiliary verbs as well as structural similarities and differences of subject complements that follow be-verb. Some of the hypotheses here are of general property and are expected to contribute to the progress of linguistic theory.

キーワード： be動詞、 叙述、 主格補語

1. はじめに

藤内(1997)において叙述のbe動詞の統語的特異性について考察したとき、理論の枠組みとしては原理とパラミターのアプローチが用いられていた。また、理論の特徴としては、主語と補語をbe動詞の2つの項として捉え、2項の一致関係を記述するために、当時一般的に用いられていたAGRoPの特殊な形、AGRcPを仮定せざるを得なかった。

現在、生成文法の理論的な枠組みは極小主義(The Minimalist Program of the Linguistic Theory)に移行し、理論的枠組、各種構文の分析などは各研究者間で安定した形が用いられている。本稿は、統語構造は論理構造を背景とするという藤内(1996)の前提に基づき、原理とパラミターのアプローチでは記述しきれなかった叙述のbe動詞の統語的な特異性を、再度極小主義の枠組みで記述し直し、極小主義の利点を得て、藤内(1997)では予想できなかった叙述のbe動詞の統語的特異性の根源的

な原因について再考することを目的とする。

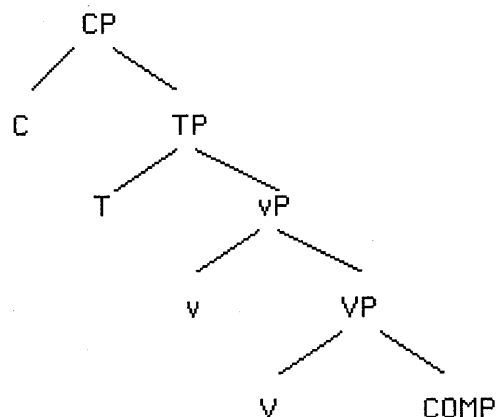
なお、本稿はいかなる意味においても、藤内(1997)からの変節を意味するものではない。

2. 叙述のbe動詞の統語的特異性

2. 1. 望ましい理論

現在、一般的な他動詞構文に与えられている構造は、概ね(1)のようなものである。

(1)



ところで、叙述のbe動詞構文は、以下のよ

うな統語的な特異性を示している。

(2)

- a. This is a pen.
- b. This isn't a pen.
- c. Is this a pen?

(3)

- a. It is I.
- b. It is me.
- c. *I am been by it.

(2a)は一見普通のNVNの線形順序の英文で、一般的な他動詞構文と線形順序に限れば一致するので、奇異な印象を与えない。しかし、動詞の目的語の位置にあるように見えるa penは、実際には目的語ではなく主格補語と呼ばれている。他には、(2b)に見るようにbe動詞は直接否定語のnotと縮約して直接否定され、また(2c)で見ないように疑問文では主語とbe動詞の倒置が見られる。このことから、be動詞を他の動詞と同じように分析していたのでは、他の動詞も誤って否定語による直接否定を許し、また主語とbe動詞の倒置を容認する理論を構築することになる。¹

また、(3)に見るように、主格補語の位置に生起する人称代名詞の形式的な格標示においても、主格標示の(3a)と目的格標示の(3b)の2つの語用があり、目的格標示できるとは言えども(3c)に見るように一般的な受動態に派生することは出来ない。

このことから、叙述のbe動詞の統語的特異性を記述するための正しい理論は、顕在的な派生段階で否定語による直接否定と主語との倒置をbe動詞にのみ限定できなければならない、また主格補語の位置は典型的な項の位置ではないことを示し、かつ他の一般的な構造からの変異点はその点のみでなければならない。つまり、叙述のbe動詞の統語的な特異性は、be動詞の

統語的特性と、主格補語の統語的特性を考察すれば、その相互関係として記述することが出来ることになる。

2. 2. 主格補語の範囲

be動詞に任意の句が後続する構文には、代表的なものが3つある。1つはNPが後続する構文、次にAPが後続する構文、最後にPPが後続する構文である。

(4)

- a. You are my sunshine.
- b. You are very beautiful.
- c. You are in my heart.

主格補語がAPである構文には、主語と主格補語の一致が見られる以下のような例がある。

(5)

- a. She is pregnant.
- b. *He is pregnant.

藤内(1997)では、(5a)や(5b)の主語と主格補語には意味的な一致関係があるとし、AGRcPという新奇の範疇を仮定することによって、(2a)で見たような主格補語を直接目的語と区別し、また主語と主格補語の間の一致関係を記述しようとしていた。AGRcPという範疇を仮定するに到った理論的な動機は、Pollock (1989)の分裂INFL分析(Split INFL Analysis)であった。しかし、その後の理論の変化にともない、一致関係は局所的な領域における主要部・指定部や主要部・補部の関係で記述するのが理論的に最小であると認識されるようになり、現在の枠組みではAGRを特に派生で用いることはなくなった。このことは、極小主義に従う本稿でも同様にAGRcPを仮定することが出来なくなったことを表す。従って、本

稿でも主語と補語の一致関係は、述語領域における局所的な関係によって説明するものとする。

be動詞にPPが後続する(4c)の例は、一般には存在を表す構文であると理解されている。しかし、以下のような例では、PPは主語の抽象的な位置よりも、その状態を表していると考えるほうが妥当である。

(6)

- a. You are in danger.
- b. You are in trouble.
- c. You were beside yourself.

例えば(6a)で表されている「窮地」は具体的な場所ではなく、単に状態を表す比喻表現に過ぎない。本稿では(6)の例文で表される状態を場所的状态とし、be動詞にPPが後続する構文も、NPやAPが後続する構文と並行して状態を表す構文として捉えることにする。

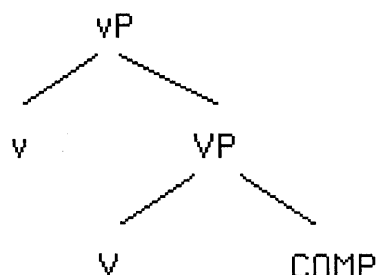
この仮定から、be動詞の補部にあると仮定できる主格補語に関する理論は、NPとAPとPPを並行して記述できなければならないという、新たな課題が与えられることになる。本稿の以下の議論では、前述の課題を達成できる叙述のbe動詞の句構造について見ていく。

3. 叙述のbe動詞のVP構造

3. 1. 一般的なVP構造との差異

Chomsky(1995)に代表される極小主義の句構造では、VPに対して以下のような殻構造が仮定されている。この殻のことをVP殻(VP Shell)と言い、その理論の端緒はLarson(1988)の二重目的語構文を記述する構造であるが、Chomsky(1995)の形が内項と外項の対称性を記述するために現在広く仮定されている。

(7)



一般的なVP殻構造では、語彙的VPは軽動詞vの投射vPの補部となって、主語はVP内主語仮説に従ってVP指定部に基底生成され、vPで意味役割が、TPが格素性が照合されるという派生のメカニズムになっている。叙述のbe動詞も拡大投射原理に従い、義務的に主語を必要とするので、その主語は一般的なVPの分析のようにVPの指定部に基底生成され、vPの指定部で意味素性を照合されると仮定する。その意味素性は少なくともAgentではないと思われる。Theme項か、もしくは未だに定義されていない意味役割が照合されるのかもしれない。本稿は叙述のbe動詞は主語としてTheme項を必要とすると仮定する。

もし叙述のbe動詞のVPが、一般的なNVNの連鎖である他動詞構文と並行する構造を持っているならば、主格補語は語彙的VPの補部に存在することになる。もし主格補語がAPやPPならば理論的に困難ではないが、主格補語としてNPが生成されている場合が、これまで理論的な問題点であった。古典的に対格付与の関係(VがNPをm統御する関係)にある式形で、この場合はNPにはどのような格が付与されるか、もしくはそもそも格が付与されるのか自体が曖昧であった。

この件で著名な研究にBelletti(1988)があるが、その中ではbe動詞は非対格動詞であり、補部のNPに内在格である部分格(Partitive Case)を与えると仮定されている。この分析はThere構文の定性効果を首尾よく説明するが、

補部がAPやPPである場合は部分格付与能力が不要になり、この仮定は範疇指定的であると言える。また部分格が付与されたNPは仮定の上では不定名詞句になるため、be動詞の補部の定名詞句は対格付与されると仮定せざるを得ず、結果として付与される格に揺れがある(3a)と(3b)の例に説明が与えられない。本稿はThere構文における定性効果について対案を与えないが、VPが補部に主格補語を選択するという構造には困難があると主張する。

これまでの議論で、語彙的なVPが主格補語を補部に選択することは困難であることが示された。ところで、(7)の構造はvPがVPを補部として併合された構造であるが、be動詞を用いた叙述の構文は他の語彙的な動詞と異なり、その特徴として主語と主格補語の意味内容の解釈だけで文の意味のほとんどを表すことが出来る、極めて稀な構文である。その語彙的意味の希薄さが、以下に見るような小節(Small Clause)解釈を可能にしている。

(8)

- a. I consider [him honest.]
- b. I consider [him to be honest.]

(8a)と(8b)のカッコ内の解釈は並行する。(8a)と(8b)の形式的な違いは語彙的なbeの有無であり、語彙的なbeの欠如によっても(8a)のように小節として解釈を得ることから、beは叙述の意味解釈にほとんど寄与していないことになる。この意味的な特性の欠如により、be動詞は動詞として「軽い」特性を持っていて、助動詞的な振る舞いを可能にしていると仮定するのは、取り立てて奇抜な仮定ではないはずだ。

この推論に基づき、本稿では叙述のbe動詞は軽動詞(Light Verb)と呼ばれるvPの主要部・vの具現形であると仮定する。一般的な他動詞構文ではVの主要部移動の着地点として要求さ

れているのであり、本稿の仮定はその着地点にbeが基底生成されるというものである。この仮定を逆にすれば、このbeはVPの主要部には生成されないことになる。vの主要部に基底生成されたbeは、やはり語彙的な動詞と同様にTP主要部に移動し一致の素性の照合を受ける必要があると思われる。ここで、この移動を可能になる動力として、beはVと同じ範疇素性[+V]を持つと仮定する。この素性があるため、beはTP主要部に移動が可能となる。この仮定は、適切な予想をしているように見える。しかし、この仮定では[+V]素性を持つ他の語彙的な動詞も同様にvに基底生成される可能性があり、修正が必要になる。

そこでbeは助動詞的な振る舞いもするので、[+Aux]素性も同時に持つと仮定する。この[+Aux]素性は、[+Q]素性を持つCP主要部への移動、否定辞のNegP主要部への移動を可能にする素性として仮定できる。NegPは統語構造で最上位にある[+Aux]素性を持つ範疇を補部領域に併合し、NegP主要部に移動できるのは[+Aux]素性を持つ主要部に限定される、また[+Q]素性を持つCP主要部への移動も[+Aux]素性を持つ要素のみに限られると仮定すれば、[+Aux]素性を持つ叙述のbe動詞の統語的特異性の多くを説明できる。主語と助動詞の倒置は、主格の照合を終えた主語を残して[+Aux]を持つbeが[+Q]素性を持つCP主要部に移動するためであり、否定辞による直接否定も、[+Aux]素性を持つbeがNegに付加し、その後両者ともにTP主要部に移動するためであると考えることが出来る。なお、本稿はこの仮定が助動詞のdoに関して持つ含蓄に関して、考慮の対象外とする。

しかし既に[+V]を持っている動詞が[+Aux]も持てるのならば、やはりどのような動詞でも[+Aux]を持って、be動詞と同じ統語的な振る舞いをする可能性を阻止できない。²そ

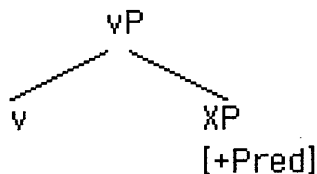
のため、[+Aux]素性と[+V]素性は相補分布すると考え、叙述のbeは[+V]を持つ可能性を排除し[+Aux]素性のみを持つとする。[+Aux]素性を持つことによりvP主要部に生じることが出来、この[+Aux]素性も[+V]と同様にTP主要部への移動を可能にすると仮定する。³

上記の仮定により、beをvPの主要部に生成するのであれば、語彙的なVPを生成する必要はなくなる。叙述のbe動詞の統語的な特異性を記述する理論は、以前はVP補部に配置され则认为られていた主格補語の位置と、VPが生成されないことにより、以前はVP内主語仮説によってVP指定部に生成していた主語の位置を特定出来なければならない。以下はこの2点についての議論である。

3. 2. 主格補語と主語の位置

主格補語はbe動詞に直接後続しているので、be動詞は少なくとも主格補語を直接支配するか、補部領域に配置していると仮定するのが理論的に最小である。本稿では、叙述のbe動詞の主格補語はbe動詞の補部領域に存在すると仮定する。前述より、叙述のbe動詞はvPの主要部であると仮定しているので、主格補語はvPの補部に配置されることになる。その構造は以下の(9)である。

(9)



この仮定は、何故主格補語がvP補部の位置にあっても適格文が生成されるのか、そして依然として主語が何処にあるのかを説明出来なければならない。まず、vP補部の位置であるが、

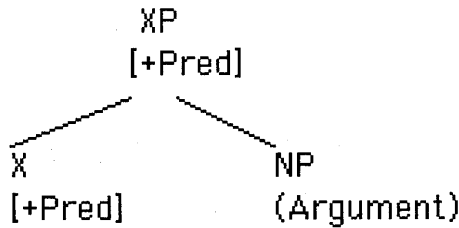
一般的なNVNの線形順序の他動詞構文ではこの位置には語彙的なVPが生起している。VPは無条件にこの位置に生起しているのではなく、何らかの素性を内在することによってこの位置を認可されていると思われる。本稿ではこの素性を、文の述語であることを表す[+Pred]素性であると仮定する。この[+Pred]素性によりVPは論理的な述語であると解釈でき、またvP補部に生起していても統語的な派生が破綻しないとする。

[+Pred]素性をもつ範疇が述語となるのであるならば、かつ[+Pred]は範疇指定的な素性ではないとするならば、この素性はNPやAPやPPにも存在していても何も問題はない。本稿では、主格補語とはこの[+Pred]素性を持つNPやAPやPPであり、この素性を伴って計算機構に投入されると主張する。もし主格補語の位置に誤ってVPがあったとしても、そのVPは顕在的に移動が出来ず、主要な素性が解釈されずに残るので、完全解釈の原理に抵触して派生が破綻する。また本稿の仮定に反し、beがVP主要部に生成され、その上で[+Pred]素性を持つ主格補語を補部に配置した場合は、そのbeが[+Aux]素性を持ち得ないので、be動詞特有の統語的特異性を説明できない。従って、上の仮定は適切に動機付けされていると言える。

次の議論は主語についてである。VP内主語仮説に従えば、主語はVPの中にある。一般的な構造ではVP指定部に基底生成され、その後素性照合のために移動すると仮定されている。ところで、APの主要部AやPPの主要部Pは、一般的に一項述語と考えられている。APやPPが[+Pred]素性を持ち、かつ一項述語であるならば、[+Pred]素性を持つNPもまた項ではなく一項述語となると仮定できる。一項述語がその唯一の項を配置する際、構造的に最小なのはその項を述語の補部領域に置くことである。本稿では、一項述語が統語的に必要とする項が、

最終的に叙述のbe動詞構文の主語になると仮定する。以下はその構造である。

(10)



この構造は、いくつかの重要な帰結を持つ。まず、She is a student.という英文の「学生である」という題述を一項関数 $S(x)$ とし、sheを x に代入される個体変項の解釈関数とした場合の、述語論理式の式形と並行する。論理式の解を求めることは、統語的には述語と項の素性の比較・照合に並行していると思われる。第二に、この局所領域は中右(1994)における中核命題を統語段階で具現したものであるとも考えられ、藤内(1996)で捉えようとした、「統語構造はその論理構造を背景にする」という概念にも合致する。最後に、補部領域からvP指定部において主題役割の照合を経て、TP指定部まで移動する特性は、Belletti(1988)で主張されているところのbeは非対格動詞であるという主張とも並行する。本稿の仮定するメカニズムでは、vPは[+Pred]素性を持つ述語の主語の主題役割を照合する役割を果たす範疇として存在理由を持つ。

また(3a)と(3b)の対立によって、一見すれば格標示の矛盾とも捉えられる例は、meやIという主格補語の[+Pred]素性に注目すれば解決が得られる。まず[+Pred]素性を持つことによってこれらの主格補語は項ではなくなり、格標示の義務から開放される。さらに両者はおなじ解釈を持つ述語であり、それらの差異は計算機構に投入された時点で顕在的で、話者の属する話者集団の慣習によりどちらが選ばれても

述語論理的には何の差異もない、同じ述語関数の異形態であると思われる。

この分析の問題点は、主格補語としてPPが選ばれた場合である。(4c)の様なPPが主格補語になっている場合は、統語的主語を前置詞の補部領域に配置することは出来ない。そこで本稿はVP内主語仮説に並行して、主格補語のPPは非能格の二項述語と考え、統語的主語はPP指定部に基底生成されると仮定する。それ以降の派生は他動詞構文のそれと並行すると思われる。PP主要部はその補部を元位置で内項の主題役割と格素性を照合すると仮定できれば理論的に最小であるが、項は任意の位置では1つの素性しか照合されないとすれば、ある素性の照合が済むと内項は移動することによって内的指定部を投射し、次の位置で次の素性の照合を行うと仮定することが出来る。更に、述語は項を主題役割の照合義務を充足するために併合すると仮定すると、最も局所的な位置である補部領域では、まず主題役割が照合されると考えられる。

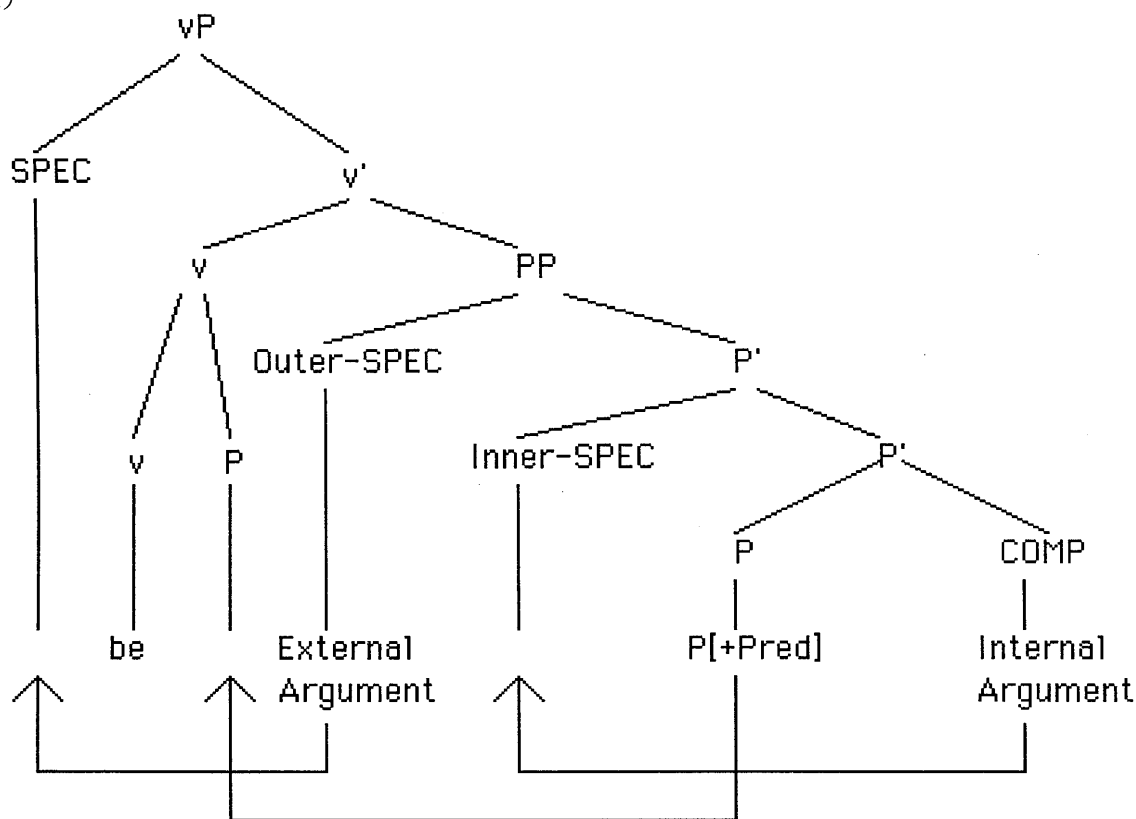
一般に主要部と局所領域を構成するのは補部と指定部領域であるが、統語的派生が基底生成や移動変形の度に計算の対象になるとすれば、また述語が統語的に二項を必要とするならば、指定部よりもより局所的な補部領域にある内項がまず計算対象となる。次に可能な限り短距離で内項が局所的な領域に移動するならば、移動先は同じ範疇内の指定部領域しか存在しない。ところで述語がもう一項統語的充足のために必要とし、その項も同様に可能な局所領域に存在しなければならないのならば、外項もまた指定部に存在すると仮定するしか解決がなく、その結果指定部を2つ仮定しなければならない。この場合、内項の方が主要部にとって局所的なので内項の方をより内的な指定部に移動させるものとする。この理由は、内項は既に補部領域で主題役割の照合を済ませており、仮に指定部の

主語を飛び越えてvP指定部に移動してもそこで照合されるのは主題役割であること、またその移動が行われた場合は、主語が主題役割を照合される場所がなくなること、vP指定部からの距離が主語のほうが近いことが挙げられる。更に、1つの位置で照合される素性は1つであるならば、内項は元位置で主題役割、移動先の内的指定部で斜格素性の照合を受けるものと仮定できる。これは、内項は述語領域で素性照合を完了させると仮定するのと同じである。内項が局所領域内で素性の照合を完了させるという分析は、藤内(1997)での主張と並行する。

次に内的指定部の方が外的指定部よりも局所的なので、主要部の素性照合はより局所的な要素に対して優先して行われるとするならば、一度指定部に対して素性照合を行った主要部が、

さらにもう一度指定部に対して素性照合を行うことは、素性照合の済んだ内的主要部に対して再度素性照合を試みることになり、統語的な破綻の原因となる。つまりPPの外項はその位置では何の素性も照合されない。また照合子のPP主要部も未照合の素性が残るため完全に解釈されていないので、外項はvP指定部に、PP主要部もvP主要部に移動して主題役割が照合されるとする。述語主要部の移動については後述する。この仮定により、be動詞の主格補語は必ずしも一項述語とは言えなくなったので、本稿は今後はただ単に述語として言及するものとする。この派生のメカニズムを以下に図示する。

(11)



ここまでの議論によれば、本稿が主格補語としているNP、AP、PPはその述語としての構造も派生も異なるが、[+Pred]素性を共通に持つことでbe動詞に義務的に必要とされる要素である共通点を持つ。また、述語とその主語が述語領域という局所的な領域に存在するとする仮定は、述語領域が中核命題として解釈されることを意味するが、このことについても述語各範疇に共通する性質であると説明できる。この共通性は[+Pred]素性の仮定と極小主義の枠組みによる考察によって解明されたものであり、[+Pred]素性の理論的な動機付けの証明になっていると言える。

ここまで、叙述のbe動詞はvP主要部であり、主格補語は[+Pred]素性をもってその補部に併合されると仮定してきた。ここにまだいくつかの問題が残る。[+Aux]素性を持つクラスの明確化と、主語の素性の照合である。以下は、それらについて考察する。

4. 理論の統合

4. 1. [+Aux]素性を持つクラスの明確化

本稿は[+Aux]を持つ叙述のbeはvP主要部であると仮定している。これはbeがVP主要部でないことを仮定しているが、beが助動詞的な振る舞いをするを説明するには未だ弱い仮定である。現在の生成文法の枠組みでは、VP主要部はvP主要部を経てTP主要部に移動し、一致の素性の照合を受けることになっている。素性が若干違っていても、一般的な動詞の移動の経路は全て同じなので、一般的な動詞と助動詞を峻別することが出来ない。本稿はそこで、助動詞のクラスを明確にし、その上で叙述のbe動詞の位置づけを確認することにする。

本稿が仮定する[+Aux]素性は一致の素性の一種であり、主要部がTPまで移動する動機となり、統語的には[+Q]素性を持つCP主要部へ、またはNegP主要部の移動を可能にする素

性として定義されている。助動詞的要素であれば、全てこの[+Aux]素性を持っていると仮定できるが、ただそれだけでは助動詞のクラスを細分化できない。まず、典型的な助動詞である法助動詞のクラスは、[+Aux]以外に[+Tense]素性を持つとする。[+Tense]素性を持つ法助動詞はTP主要部の具現形として生成されると仮定できる。そしてその素性のために定形でしかあり得ず、仮に非定形TPに生成された場合は顕在的派生は破綻すると仮定する。

次に文法相や態を担う助動詞である進行形や受動態のbeは[+Aux]とvPを投射させる[+v]を持つと仮定する。本稿の主張では、vPは[+Pred]素性を持つ述語を補部領域に併合する範疇であり、[+Pred]素性の要素を補部に併合しないと派生が破綻するが、この[+v]素性は補部領域に[+Pred]素性を持つ述語の代わりに別のvPを併合することを可能にし、拡大されたvP群が[+Pred]素性を補部領域に併合すると主張する。つまり[+v]素性を持てば必ずvPを投射し、その結果vPを複数併合する動機となる素性として仮定されている。更に進行形、完了形の屈折語尾である-ingや-enは[+v]素性と非定形時制を表す[-T]素性を持ち、[-T]素性によって移動してくる要素の一致素性を相殺するvP主要部であると仮定する。つまり、[-T]素性を持つ範疇は補部領域に一致の素性を持つ範疇を併合する必要がある、また[+Aux]素性を持つ範疇の補部領域に併合されなければ、[-T]素性を持つ主要部とその位置に主要部移動してきた主要部が、引き続いて[+Tense]素性を持つTPに移動するという素性上の矛盾が発生し、派生が破綻する。-ingや-en補部に[+Pred]であるVPが併合されている場合は、VP主要部の移動は-ingや-enで停止し、VP主要部の一致の素性はそこで相殺され解釈の義務から免れる。なお、進行形と受動態が重複する場合は、-ingの補部に受動態のbeが併合されると仮

定できる。本稿は叙述のbe動詞構文をその主な考察の対象にしているので、また叙述のbe動詞構文は受動態になり得ないため、-enについてこれ以上積極的な議論をしない。

叙述のbe動詞は、これらの助動詞のクラスから峻別され、助動詞の素性としては[+Aux]のみを持ちvP主要部に基底生成される。もし叙述のbe動詞が-ingの補部にある場合は、-ingの[-T]素性によってbeの[+Aux]素性が相殺されると考えられる。また[+Aux]素性は不定詞のtoの持つ[-Tense]素性によって一致の素性を失い、また一致の素性の照合が終わったTP主要部に移動することで一致の素性を失っても、非定形として具現することが許されている。この性質は[+V]素性と並行する。結果として語彙的動詞も助動詞も、範疇素性としての振る舞いは並行する部分があり、唯一[+Tense]素性を固有に持つ法助動詞だけが[+Tense]が原因となって統語的な振る舞いに特異性を持つのである。

上記の仮定は、助動詞のクラスの相補分布を説明している。これらの特性を表にして表記すると、以下ようになる。なお、完了形のhaveについても同様と思われるが、この仮定の持ちうる含蓄については、本稿は議論の対象外とする。

(12)

これらの助動詞的要素の中で、進行形、受動態のbe動詞と叙述のbe動詞は、TPとVPの間のvP範疇に属するという共通点があり、また非定形を持つという点で法助動詞とは異なり、また疑問文で主語と入れ替わり、否定辞により直接否定を受けるなど、一般的な動詞ともまた異なっている。位置的にも両者の中間であり、[+Aux]素性によって位置的にも統語的振る舞いにおいても、両者とは異なるあいまいな性質を見せている。

4. 2. 主語の素性の照合

本稿は、叙述のbe動詞はvP主要部であり[+Aux]素性のみを持つ、また主語は主格補語の補部領域に基底生成されると仮定している。主語はその意味役割と格素性の照合を必要とするのは、他の構文と並行する。前述のように、叙述のbe動詞構文の統語的な主語は、主格補語が一項述語か二項述語かによって基底生成される位置が異なり、一項述語のNPとAPの場合は補部領域、二項述語のPPの場合は指定部領域に基底生成されると仮定している。一項述語と二項述語での主語位置の違いは、名詞、形容詞、前置詞の範疇素性の違いに起因すると思われる。名詞性を表す[±N]素性と動詞性を表す[±V]素性の組み合わせで、名詞は[+N, -V]、形容詞は[+N, +V]、前置詞は[-N, -V]の組み合わせを持つと仮定されているが、[-N]素性を

素性	範疇	派生の収束の条件
[+Aux]と[+Tense]	法助動詞	[+Tense]として TP 主要部に基底生成
[+Aux]と[+v]	進行形・受動態の be 動詞	TP 主要部に移動し、[+Aux]の素性の照合、もしくは一致の素性を失う
[+Aux]のみ	叙述の be 動詞	TP 主要部に移動し、[+Aux]の素性の照合、もしくは一致の素性を失う
[+V]のみ	語彙的動詞	TP 主要部に移動し、一致の素性の照合、もしくは一致の素性を失う

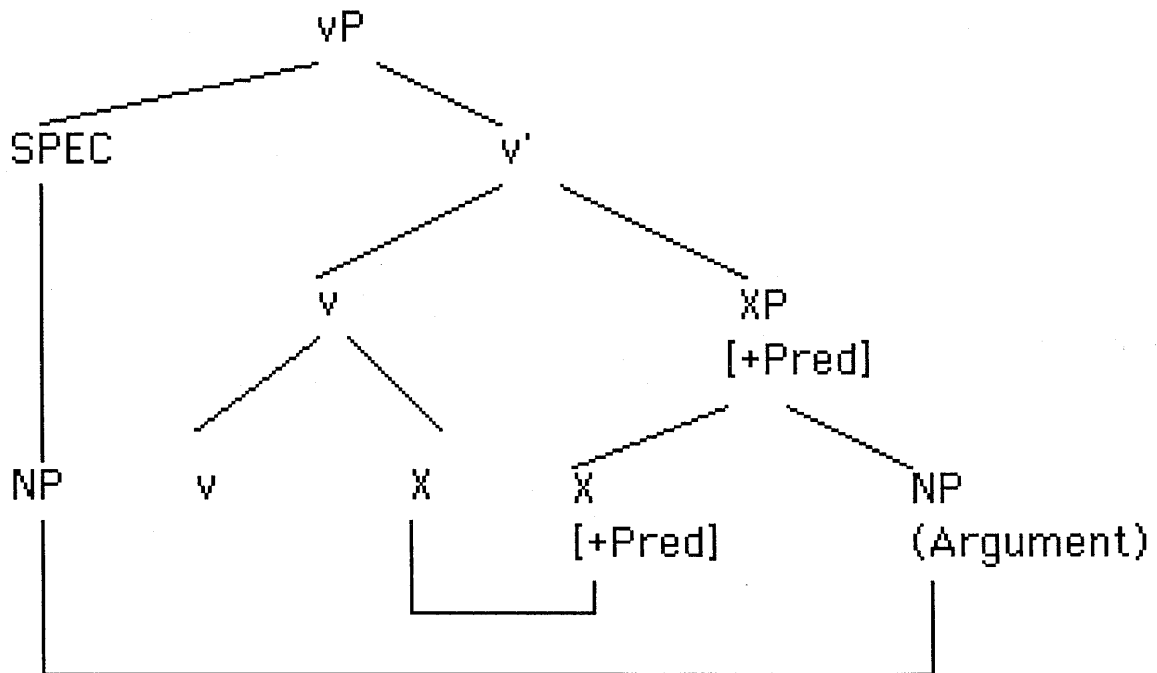
持つ範疇のみが独自に局所領域で項に任意の素性を照合することが出来る」とすると、主格補語では前置詞のみが局所領域に配置された項の素性を照合することが出来る。これは[-N]素性を持たないのであれば、述語の局所領域内でのような素性の照合も受けられないと仮定するのと同じである。

二項述語の場合は、主語は指定部に基底生成されると仮定されるが、それは語彙的な動詞と並行する。まずより局所的な関係にある内項が、意味素性の照合を済ませた後で内的指定部に移動して格素性を照合されるので、より遠い外的指定部にある主語はその位置ではどの素性の照合を受けられないので移動することが既に述べられている。一項述語の場合、名詞では項は最も局所的な位置である補部領域に基底生成される。名詞は[-N]素性を持たないので元位置での照合が不可能ならば、移動できる位置はvP指定部と考えられる。形容詞の場合、もし二項をとる形容詞の場合は主語は指定部にあり、前置詞と同様の理由によってその位置では素性の

照合を受けられない。⁵ 一項の場合はやはり補部領域に基底生成されると仮定できるが、形容詞が[-N]素性を持たないので元位置での照合が不可能ならば、結果として主語は語彙的素性の照合のために移動する。この仮定は、[+Pred]素性と[-N]素性を持つ述語はその項を述語の局所領域で素性照合する義務があり、[-N]素性がなければ例え項を持っていたとしても素性照合の義務はないと仮定するのと同じである。その場合も、他の構文と並行してvP指定部やTP指定部は同様に素性照合を行わなければならない、述語の局所領域で素性照合されなかった項は、その位置に牽引されて素性の照合を果たす。

その際問題なのは、vP主要部のbeが助動詞と同等なので、語彙的な素性の照合子としては適格ではないと考えられることである。従って、派生の段階で、[+Pred]を持つ述語の主要部は、以下のようにvP主要部に主要部移動してbeに付加し、述語とbeが共にvP指定部の主題役割を照合すると仮定する。

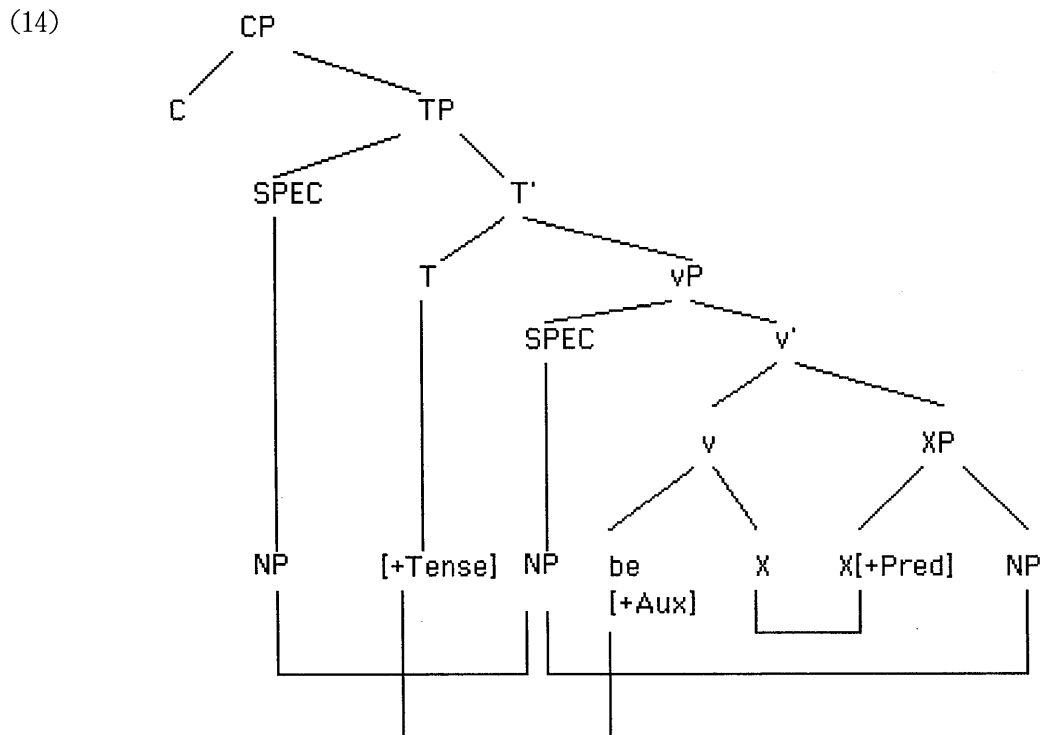
(13)



述語の補部領域の統語的主語は、これまでの仮定に従えば、素性の照合のために顕在的にvP指定部に移動すると仮定する。主要部移動によってbeに付加した述語の主要部は、その述語の意味的特性と、vP主要部という位置的特性によって、vP指定部に移動してきた主語の意味素性を照合する。その後beは[+Aux]素性があるのでTP主要部に移動し、述語の主要部はvP主要部に移動した後、他に照合が必要な素性がなければその位置に残され、主語は次はTP指定部に格素性の照合を受け

るというメカニズムを仮定することが出来る。もし仮にbeが-ingの補部であっても、-ingはbeが[+Pred]素性までは相殺しないので、述語の主要部は-ingに付加したbeに更に付加することによって、述語の項はbeingの主語として意味役割を解釈される。

これらの主張を総合すると、叙述のbe動詞の統語的特異性全てを説明できる最終的な構造は、内項を1つ必要とする述語をモデルにすると以下ようになる。



藤内(1996)での主張「ある表現の統語形式はその命題構造に並行し、かつ統語形式はその命題構造を前提とする」に従い、統語部門始発の計算機構にはその文の派生に必要な範疇や素性のみが投入される。叙述のbe動詞の主格補語は[+Pred]素性を伴い、述語XPとして具現する。述語XPは[+Pred]素性を持つために、その意味内容が指定する項を補部領域に持っている。そして[+Pred]素性を持つことで次に計算機構でvPであるbeの補部に併合されること

が可能になる。[+N]素性を持つ一項述語の場合は、統語的主語はXP補部領域にある。述語XPは補部領域にある項のいかなる素性も照合できないので、XP主要部はvP主要部に移動し項を誘引し、項も主題役割の照合のためにvP指定部に移動し、意味役割照合能力を持つが意味を持たないvP主要部であるbe動詞と、意味のみを持ち主題役割照合能力のないXP主要部が、合同で項の意味役割を照合する。二項述語の場合は、補部に基底生成される内項の主題役

割と格素性は述語範疇内で照合を完了し、主語はXP外的指定部に基底生成される。元位置ではやはりいかなる素性も照合されない主語の素性の照合は、一項述語と同様にXP主要部がvP主要部に移動して主語を誘引し、XP外的指定部の主語がvP指定部に移動することで行われる。その後、格素性と一致の素性を照合する義務のあるTPが、格素性が済んでいない項を含むvPを補部に併合する。XP主要部が[+Q]を持つWh句ではない場合は、XPは素性の照合義務を果たしたので移動先に留まり、beはXP主要部を取り残して単独でTP主要部に移動して自身の一致の素性を照合する。その後be動詞はvP指定部の項を誘引する。項はvP指定部からTP指定部に移動して格素性の照合を受ける。以上が、本稿が仮定する叙述のbe動詞に特異的な派生のメカニズムである。⁶

5. まとめ

本稿では、藤内(1997)での研究を元に更に極小主義の利点を得て、叙述のbe動詞の統語的な特異性を説明できる理論を議論してきた。本稿が仮定した(14)の構造が一般的なNVNの線形順序の他動詞構文と異なっているのは、beが[+Aux]素性を持ちvP主要部に生成されること、語彙的VPが併合されないこと、主格補語には[+Pred]素性があるvP補部に併合されること、主語が主格補語の補部に生成されること、一項述語はその元位置の内項に対して意味素性を照合できないので、内項は繰り上げ変形を受けることである。本稿における主張をまとめると、以下ようになる。

- 1 叙述のbe動詞は、軽動詞であるvP主要部の統語的具現形である。
- 2 叙述のbe動詞は、範疇の素性として[+Aux]のみを持つ。
- 3 叙述のbe動詞は、補部領域に[+Pred]素

性を持つ述語を併合する。

- 4 [+Pred]素性を持つ述語は、一項述語の場合は補部領域に統語的主語を併合する。
- 5 [+Pred]素性を持つ述語は、二項述語の場合は、内項の素性は述語が独自に照合を行う。

1の主張は叙述のbe動詞の語彙的意味の軽薄さがその根拠になっており、2の主張によってVPに生起することが不可能であることにより動機付けられる。また2の主張により、叙述のbe動詞の統語的特異性が説明可能になっている。3の主張により、be動詞補部のNPは格標示の義務から免れ、また正しく述語として解釈される。4と5の主張は、be動詞を用いた叙述文の解釈に必要な要素が述語領域に集中することを意味し、また4と5の並行しない派生の手続は、その範疇素性の組み合わせによって適切に動機付けられている。また、藤内(1996)の主張に従い、語彙的な特徴による差異は命題解釈の最小形式・中核命題の統語的具現形の、理論的に正しく予想される違いに限定され、その他の大局的な統語構造は並行した統語派生モデルが提唱されている。

以前の理論から進化したのは、4と5の主張から、AGRの要素を仮定せずとも、主語と主格補語が局所領域に存在することにより、意味的・主題的な一致関係を説明できる構造関係になっていることである。この句構造のおかげで、叙述のbe動詞の解釈が主語と主格補語によって行われることが明らかになった。また、今回仮定した[+Aux]や[+Pred]、[±N]、[±V]素性は一般的な素性で、場当たりの仮定ではない。また、叙述のbe動詞構文はその特異性を表すために一般的な構造と異ならないが、その差異が特徴的かつ最小で、その差異の存在が一般的な素性の相互作用によって適切に動機付けされている。そのため、この

理論は上記の条件を満たした、望ましい理論であると言える。結果として、叙述のbe動詞の統語的な特異性も、主格補語のNP、AP、PPの相違点も共通点も、全て語彙的な素性の相互作用として説明が可能になっている。その上で、命題としての文を解釈するのに必要な要素は局所領域に集結し命題解釈の中核をなすこと、外項は述語外部で、内項は述語内部で素性照合を完了させることは、藤内(1997)から一貫している主張である。つまり、本稿は藤内(1997)から主張に変更はなく、分析手法がその後の言語理論の変化に合わせて変化しただけである。

なお、この研究は、極小主義および生成文法の理論の進展に合わせて、今後も継続して行われていく。加えて、理論の組立に必要なだったために、助動詞的要素、範疇素性に関していくつかの言及を行ったが、これらの言及は大変興味深いため、今後の研究対象としたい。

注

1. be動詞には、他にも現在形が3形態、過去形が2形態あり、仮定法過去形でもwereが用いられるという特異性があるが、この特異性については本稿では言及しない。
2. 英語にも過去には、一般動詞が助動詞のように疑問文で主語と入れ替わり、またdoの支えなしに否定辞によって直接否定を受ける時期があった。[+V]素性と[+Aux]素性の相互作用の変化については、通時的な研究を待ちたい。
3. [+Aux]素性と[+V]素性が相補分布すると、片方が存在するともう片方が存在できない。しかし、注2でも見た通り、英語の歴史の中にはその両者が必ずしも相補分布していなかったと思われる時期がある。古代の英語では全ての動詞が

[+Aux]と[+V]を持っていて、史的变化によって[+Aux]素性に变化が起き、[+V]と干渉を起こすようになったのかもしれない。

4. [+Pred]素性はそれを持つ範疇を述語とするが、TやCなどの機能範疇がその素性を持つことを阻止すべきかは議論の必要がある。例えば述語になっても解釈が不可能であるので特に制約を必要としないか、またはLFでの解釈不能による破綻を待たず、顕在的派生段階で破綻させるようにこの素性を語彙範疇に限定するか、立場は2つ考えられる。

既述ではあるが、[+Pred]素性のもう一つの可能性は、[+Pred]素性を持つと述語となるが、述語とは主題に対する題述なので、項を必ず一項必要とするという仮定である。後述する[±N]および[±V]素性と[+Pred]素性の相互関係の研究より、[+Pred]素性を持つことで一項を必ず必要とし、[-N]ならば述語が局所領域の項に対して素性照合が可能になり、項は[+N]素性を持つ要素にとっては内項に、[+V]素性を持つ要素にとっては外項となるメカニズムを仮定することが出来る。このメカニズムは、動詞が項を1つ持つならば必ず外項であることを予想し、拡大投射原理、もしくはEPP素性を廃止することが出来る。しかし[+N, +V]素性を持つ形容詞の項の配置については、この理論は項を補部に留めるか移動させるか、あいまいな予想をすることにもなる。このあいまいさは、形容詞が限定用法と叙述用法の2つの用法を持つことにも並行すると思われるので興味深い。

なお、このメカニズムに従えば、同じ[-N]素性を持つ範疇である動詞と前置詞は、補部の項に対して標示する格が異なるが、[±V]素性は補部に対する対格標示に関係すると予想できる。このメカニズムは今後の研究の対象としたい。

5. 形容詞の中にも、I am fond of cookies.のように他動的な性質を持つ形容詞があるので、それらの形容詞は二項述語とされている。この現象は、形容詞の一部にはもう一つ[+Pred]素性を持つ任意の範疇を補部領域に併合し、その語彙的特徴を満たすもう一つの項とするものがあると考えられる。一方で、この場合形容詞は[+Pred]素性を持つ述語であり、両者は同じ[+Pred]素性を持つ1つの述語として計算され、見た目上形容詞が二項であるように見えるが、もともと形容詞が必要とする項は主語のみである。ところで[+Pred]素性を持つ範疇が補部領域にあるため、指定部に併合するしか派生が収束する方法がないのである。

また、異なる範疇が併合されて二項を持つ1つの述語として計算されるので、補部領域で素性の照合が完了する項がないと、その後の移動先が足りず計算が成り立たず派生が破綻する。本稿の仮定のように、[-N]素性を持つもののみが局所領域で項の意味役割と格素性を照合できるのであれば、APの補部領域に併合される述語は範疇素性として[-N]素性を持つ前置詞か動詞しか併合されない。さまなくば、その述語の補部領域に基底生成されている項は素性の照合を受けられないことになり、派生が破綻する。かつ動詞が併合された場合は、その語彙的特性が照合できないので、結果として前置詞が補部領域に併合されたものだけが適格な計算結果を得ることになる。

この件に関しては、今後の研究対象としたい。

6. このモデルは否定文と疑問文について言及していないが、仮に否定文の生成が行われる場合は、前述のようにNegPはvPを補部領域に併合し、vP主要部であるbeは[+Aux]素性を持つのでNegP主要部に移動することが出来る。このことがbe動詞の統語的特異性の動機の一つである。その後beはNegを伴ってTP主要部に移動し、一致の素性の照合とその後の項の格素性の照合が行われる。音声的な縮約が起こるか否かは、統語部門の問題では

なく音声形式の問題であると考えられる。なお、主語の主格を照合するのは肯定形か否定形の定形動詞であるので、統語構造にNegPが併合されている場合は、TPは動詞や助動詞の一致の素性を照合したとしても、TとNegが主要部移動によって併合されないかぎり、主格の照合は出来ないものとする。

また疑問文を生成する場合は、[+Aux]素性を持つbe動詞は[+Q]素性を持つCP主要部に移動するが、素性の照合が済んだ主語はもう移動出来ず、主語とbe動詞の倒置が発生する。これもbe動詞の統語的特異性の動機の一つである。主語が[+Q]素性を持つWh句である場合は、主語はCP指定部に誘引されて[+Q]素性の照合を受け、見た目の倒置は発生しない。[+Pred]素性を持つXP主要部が[+Q]素性を持つWh句である場合は、vP主要部にXP主要部が付加移動し、さらにbeがTP主要部で一致素性を照合する通常の派生の後で[+Q]素性を持つCP主要部に移動するのは同様であるが、XP主要部もまた[+Q]素性を持つためにbeがCP主要部に移動した後でCP主要部に移動し、[+Q]素性の照合を受けると仮定できる。

参考文献

- Arimoto, M.(1989), "Against the Raising Analysis of BE," *English Linguistics* 6.
- Bach, E.(1967), "Have and be in English Syntax," *Language* 43.
- Belleti, A.(1988), "The Case of Unaccusative," *Linguistic Inquiry* 19.
- Bowers, J.(1993), "The Syntax of Predication," *Linguistic Inquiry* 24.
- Chierchia, G.(1985), *Formal Semantics and the Grammar of Predication*, *Linguistic Inquiry* 16.
- Chomsky, N.(1986a), *Knowledge of Language: Its Nature, Origin and Use*. New York: Praeger.
- Chomsky, N.(1991), "Some Notes on Economy of Derivation and Representation," in Freidin (ed.)(1991), *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, 417-54. MIT Press.
- Chomsky, N.(1992), *A Minimalist Program for Linguistic Theory*. MIT Occasional Papers in Linguistics 1. MIT.
- Chomsky, N.(1995), *The Minimalist Program*. MIT Press.
- 藤内則光(1996), 英語の命題表現の意味と構造, 修士論文, 北九州大学大学院外国語学研究科
- 藤内則光(1997), 「叙述のBe動詞の統語的特異性」, 長崎外国語短期大学論叢第49号
- Hirata, I.(1993), "AGRoP as a VP-Complement," *Metropolitan Linguistics* 13
- Hornstein, N. and D. Lightfoot (1987), "Predication and PRO," *Language* 63.
- Larson, R.(1988), "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19.
- 中右 実(1994), 『認知意味論の原理』 大修館書店
- 中谷健太郎(1996), 「原理と媒介変更の理論(Ⅲ): 叙述理論、 θ 理論」 森岡ハイツ／加藤泰彦編
- 『海外言語学情報 第八号』, 66-74. 大修館書店
- Pollock, J.Y.(1989), "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20.
- Ross, J.R.(1969), "Auxiliaries as Main Verbs," in W.Todd (ed.)(1969) *Studies in Philosophical Linguistics. Series One*, 77-102. Evanston, Ill.: Great Expectations.
- Williams, E.(1980), "Predication," *Linguistic Inquiry* 11.

E-mail : fujiuchi@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp

